



## 「アブラハムの闘い」

～神にすべてを委ねる信仰～

「もはやユダヤ人もそれ以外の人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。というのは、あなたがたは皆キリスト・イエスを信じて一体となったからである。あなたがたはもうキリストのものであるのだから、アブラハムの本当の子孫であり、神の約束の相続人である。」

ガラテヤ人への手紙3章28・29節 [現代訳]

G20が大阪で開幕しました。議長としての安倍首相の裁量が問われます。また、参院選も来月21日に行われます。しかし、自民党第一党状態は決して揺るがないのですから、首相としては全く危機感を感じてはおられないことと思いますが、逆に私たち国民は限られた狭い選択肢の中で投票をしなければならない中で、実際には苦しい選挙となってしまっています。しかし、そのようなフラストレーションを抱えた状態は国際社会でも同様にあるように感じます。

そんな状況にあって、教会は現代の預言者として、神の代弁者として、聖書から明確にメッセージを語らなければなりません。

今回は「信仰の父」と呼ばれるアブラハムが登場します。三大唯一神教と呼ばれる、ユダヤ教、キリスト教、そして、イスラム教にとっての父祖と呼ばれる人物です。この三つの宗教が今でも争いの火種となっている訳ですが、その元となった、また、その元を作ったとも言える人物がこのアブラハムでした。しかし、キリスト教が生まれたときも、イスラム教が生まれたときもアブラハムはこの世にはいませんでした。ですから、現在の争いを見て、彼はどう考えるだろうかと思えます。アブラハムも自身の人生の中で大きな闘いを経験しました。その闘いは信仰の闘いでした。しかも、時間をかけて待つという闘いでした。それができずに、彼自身も失敗してしまったのですが、息子たち、子孫たちのことを考えた時に、すべては神様の手の中にあるということを感じてこの世を去ったと思えます。息子たちが多くの民族の族長となり、イサクの子孫、ヤコブの子孫がイスラエル民族となりましたが、アブラハムのその他の子孫たちがその敵となっていくということが聖書を見ると良く分かります。そして、アブラハムの妻サラの奴隷がアブラハムに産んだイシュマエルが現在のイスラム教の元となったアラビア人の祖先となったと言われていますが、その火種は継続して存在しています。しかし、アブラハムも、またイエス様ご自身も、また、パウロ自身も信仰によって義とされるという世界を信じて、すべてを神に委ねました。

だから、私たちも信仰に立って、すべての源である父なる神様ご自身に、すべての出来事をお委ねしていく必要があります。アブラハムのように、主は真実な方で、すべてを益としてくださると信じて、お委ねし、待ち望んでいきたいと願います。